

ロービジョンフットサルの現状と教材としての可能性を探る研究

吉野 雅大 (埼玉大学)

1. 目的

本研究の目的は、児童や生徒の豊かな生活を支える「生きる力」の獲得の実現に向け、障害者スポーツのロービジョンフットサル（弱視フットサル）に着目し、競技の現状および、これからの学校体育における教材としての可能性を探ることを目的とする。

2. 研究方法

ロービジョンフットサル日本代表監督および選手へのインタビュー調査を実施した。主なインタビュー内容は、国内のロービジョンフットサルの社会的位置づけや競技をする上での環境、ロービジョンフットサルの学校教育における教材としての可能性についてである。

- 1) 対象者：ロービジョンフットサル日本代表監督1名、ロービジョンフットサル日本代表強化指定選手3名
- 2) 調査方法：半構造インタビュー方式で簡易的質問法を採用した。
- 3) 分析方法：得られたインタビューデータは、語り分析を行った。

3. 結果と考察

ロービジョンフットサルを専門としてプレーしている弱視プレーヤーが少ない（表 1）ことから、競技に関わる告知を含めた環境整備の必要性が考えられる。

学校体育における新たな教材としての可能性としては、関係者の多くが、見えにくい状況で運動するため、お互いを助け合う声や、お互いを支え合う声かけを助長させると答えている（表 2）ことから、コミュニケーションの重要性や思いやりの心を育む可能性があることが示唆された。

表 1「ロービジョンフットサルの現状をどのように感じていますか」に対する回答

質問	立場	回答内容
E X 1	監督	日本ブラインドサッカー協会にロービジョンフットサルクラブとして登録しているチームは全国で3チームしかない。3チーム全て関東のチームである。弱視者で趣味の範囲でサッカー・フットサルをやっている人がいる可能性はある。ロービジョンフットサルを広めていければ、競技人口の増加にもつながるのではないかと。
E X 2	選手	さみしく感じる。全国で3チームしか活動していない。日本選手権といっても3チームしかない。

E X 3	選手	視覚障害の学校でもロービジョンフットサルを知らない現状がある。
E X 4	選手	弱視の子どもたちがサッカーやフットサルができる環境を作らないといけない。健常者のサッカーチームとの連携などもできたらいい。

表 2 「ロービジョンフットサルが学校体育における新たな教材としての可能性は有ると思いますか」に対する回答

質問	立場	回答内容
E X 1	監督	可能性はある。見えにくい中で仲間を支えるとか、声を掛け合うなどのスポーツを行う上で大事な部分が、この競技には含まれている。見にくさが、情報を得ようと、普段動かしにくい目を動かしていることに繋がるのではないかと。
E X 2	選手	可能性はある。見にくい人がいることを知ってもらうきっかけ作り。学校現場でも見にくさを感じている人はいるはず。
E X 3	選手	福祉教育には適しているのではないかと。ぱっと見てもわからないような障害を持っている人を理解する教材としては可能性はあるのではないかと。ゴーグルをつけてサッカーをするという行為自体が惹きつけやすいのではないかと。
E X 4	選手	可能性はある。コミュニケーション能力や仲間への思いなどスポーツを行う上で大切なことが伝えられる。見え方や障害者理解の部分は見落としてはいけない。体育の授業では一回で終わらないため、継続性がある。

4. 結論

本研究において、競技に関わる環境整備の必要性があることと、競技者に関する実態調査を行う必要性が示唆された。教材としての可能性については、コミュニケーションの重要性や思いやりの心を育むことと、情報収集力を高められる可能性があることがわかった。

今後は、全盲だけでなく外見だけで判断しにくい弱視者といった視覚に障害を有する人への理解を深めていく教材としてのロービジョンフットサルの可能性をさらに探っていききたい。

5. 主な参考文献

- 1) 高橋優子, 菊原伸郎, 坂本慶子: 小学校におけるブラインドサッカー体験授業に伴う健常児童の気づき-共生社会を目指して-, 北関東体育学研究, 2: 39-45, 2017